

激しい音をたて得物同士がぶつかり合う。切っ先近くでの交差を鏢^{つば}まで引きおろし、至近距離で相手とにらみ合う。とたんに掛けられた圧力に、脚に床を踏み抜かんばかりに力を込める。押し返そうと重心を前へと押し込むが、壁を押しているかのごとく剣客は微動だにしない。防具の骨子の隙間から見える表情は、一見憤怒にさえ思えるほど険しく、じつとりと汗を滲ませていた。

数秒か、はたまた刹那か。鏢^{つば}迫り合いの中で剣客が咆えた。

天井高く響き渡ったソレが、ビリビリと顔に響いてくる。細めた目が、一回りほど身体の盛り上がった剣客を捕らえた瞬間、重心が後ろへ突き飛ばされた。

(っ!?)

踏み込まれた。理解した時、すでに脚は送り足の動作を完了させ、拮抗を保っていた。

内心安堵しながら、剣客を睨み、短く咆える。そして、咆えきる前に引いていた左足を右足の踵まで寄せ、そのまま右脚を相手のまたぐらへ潜り込ませ床を踏み潰す。足指を床に食い込ますかのごとく力を入れると、体勢を相手へと傾け——後ろへと跳躍した。

鏢^{つば}迫り合いと見せかけてのフェイント。引きの力を利用して、その

まま得物を握るために突き出された右腕を狙う。

「……ぐうっ」

その目論見は、振り下ろしの一閃によって一瞬で崩れ去る。とっさに首を傾げその一撃を肩で受け止める。防具ごとはいえ、その衝撃に口から苦い声がこぼれた。しかし、その余韻が冷めるよりも早く、目の前の影が小さくなった。

とっさに得物を握った腕を右側へと引く。右手ではなく鏢^{つば}と刀身の残った空間を、相手の得物が打ち据える。炸裂音と手のひらを通して伝わる衝撃に、その一撃の重さを痛感しながら、間合いを取った相手へと眼光を向ける。

切っ先が触れ合う程度まで後退した剣客は、その切っ先をこちらの顔へ突きつけその動きを止めた。こちらもまた、静観へと移行する。時間が止まったように睨み合ったまま、刻々と時間が過ぎていく。

自分の心音が大きく聞こえる。切っ先は動かない。

握った得物を引き絞る。切っ先は動かない。

引いた左足の踵を床から離し、右ひざに溜めを作る。切っ先は動かない。

珠になった汗がつうと流れ、顎先から防具へと吸われていく。切っ先は動かない。

相手に気取らぬよう、小さくしかし深く息を吸って吐き出す。切っ

先がブレた。

(シツ——)

鋭く息を吐き、深々と踏み込んでくる相手に合わせ、こちらはやや浅く踏み込む。互いの一步が、静観の距離を削り、必殺の間合いに昇華させる。ピリピリと鼻先が疼く。得物を握った手に自然と力がこもるのが分かった。この交錯で決まる、頭のどこかにそんなことが浮かんで消えた。そして——

後ろへ大きく跳躍した。眼前で大きくなってきていた剣客の姿が再び元へと戻りかける。が、どうやらこの動きは予想の範疇であったように、瞬時に左足をひきつけると勢いにまかせ右足をはじき出した。

一步目よりさらに深く踏み込んでくる剣客。手にした得物の切っ先はわずかに上がり、こちらの急所を切り捨てんと息巻いている。後一步、相手の身体がこちらへと迫ればそれは現実のものになるだろう。ピリピリと背筋を走るものを感じた瞬間、左足の先が床へと着地した。

——ほしきゅう 拇指球、親指、人差指、中指、薬指、小指。それら全てに重心と力を置き、踏みとどまる。そして、反動で沈められた膝のバネを使い——前へと飛び出した。

この動きは流石に予想外だったようで、骨子の奥で剣客が眼を見開くのが見えた。しかし、相手も流石というべきか、あわせるように相

手の構えが受けの型へと書き換えられる。が、

(遅いっ！)

互いの前進の勢いに後押ししながら突き出された得物は、剣客の得物を削り取りながらもその軌道を変えることなくその喉笛へと迫り、

「——突きい!!」

剣客の身体を道場の宙へと跳ばした。

「……突きはねーよ。踏み込んだところで食らうとすっげー効くんだからな。それに、お前のは全身でくるからなお性質が悪いんだよー」

「わかったわかった、悪かったよ。……けど、勝ちだからな」

叩きつけられた背中をまるめて座る昌巳あさみの小言に、苦笑しながら答える。昌巳は唇を尖らせると坊主頭をジヨリジヨリ搔いてそっぽを向いた。

そんな彼を見ながら、窓の棧に腰掛ける。窓からの景色は垣根に遮られ良いとは言えないが、全開の窓から入る風は心地良い。頬を撫でていく風が練習で火照った体から熱を奪っていく。胴着の胸元をバフバフとたわませると、生ぬるい空気が搔きだされて空気へと混ざり、体が冷める。火照りの冷めた体で深く息を吸う。今度は体の内側へヒンヤリした感触が流れ込んでくる。内臓を直接冷まされたような感覚を楽しむために一瞬息を止め、吐き出す。

そうして体が運動の名残を忘れていく中、窓から少し身を乗り出して空を見上げた。三階の屋根先に来た太陽がジリジリと照りつけてきて、目を細めた。

「……平和だねえ」

間の抜けた言葉が口をついて出た。

このまま休憩終了までのんびりとしようか、と考えながら上体を戻す。すると、閑散とした道場の中で黙々と素振りをする龍馬りょうまの姿が目に入った。

黒の胴着の上に面以外の防具をきっちりつけ、前へと踏み出し一振り。後ろへ足を引き戻し一振り。言葉にするとあまりに単純な動作を繰り返している。歩幅は一定に、滑るように、しかし力強く、その足は移動を繰り返す。ピシッと伸ばされた上体はブレることなく、肩からしっかりとまわした腕は振る竹刀の軌道を美しい半円に仕立てている。

「相変わらず練習の虫だな」

「君ほどじゃないさ。まだ足りないくらいだよ」

こちらの問いに竹刀を振り下ろした姿勢で龍馬が静かに答えを返してくる。棧から腰を上げ、彼の元へ近づくと、構えを解いた彼がこちらに向いた。まつげの長い切れ長の瞳がこちらを見据えてくる。

そんな物静かな物腰とはうらはらに、長めの前髪からは汗が滴り、荒い呼吸を隠してはいない。そんな様子に肩をすくめる。

「けど、適度の休憩も必要だと思うがな」

「そうだぞー。疲れたまま練習すると、その剣道バカの理不尽突きくらうぜー」

唐突に差し込まれた声に振り返ると、だらしなく四肢を投げ出して寝転がる昌巳の姿があった。

「……まあ、あれは悪い例な、いろんな意味で」

「わかっている」

半眼になって小声でうめくと、龍馬も同じように頷く。当の本人は気分が良いのか鼻歌など歌っているが。

そんな様子に二人して溜息をついたとき、道場の入り口の扉が開いた。

「おー、なんか遠山のおっさん職員会議があるからしばらく俺らだけでやれってさ」

竹刀を両肩に担ぐようにもって、大賀たいががのしのと入ってきた。水でも被ってきたのか、彼自慢の栗色の髪（本人曰く地毛らしい）をオールバックにするように撫でつけている。その後ろを雲雀ひばりが大きなあくびをしながらひよこひよこことついてきた。

「わかった。じゃあ、そろったことだしメニューでも考えるか」

道場に集まった四人を見回しながら提案すると、真っ先に大賀がこちらへと駆け寄ってきた。そうして、目を輝かせながら提案してくる。

「なあなあ、だったら試合稽古やろうぜ！ 総当り戦でさ！」

「試合はさつきもやっただろう。一本の取れない試合をするんじゃない、後半は打ち込みを中心に技の見直しをしたほうがいい」

それをバツサリと切り捨てたのは龍馬の提案であった。これ見よがしに溜息をつきながらのその言葉は、大賀から笑みも切り落とした。

一瞬盛大に頬を引きつらせた彼は、龍馬へと振り返ると鼻を鳴らした。

「ハッ、そうやっていつまでも型ばっかにこだわってるから試合で勝てないんだよ、お前は。型なんかより実戦で生きるテクを身につけてよ」

「ほう。なら訊くがその実戦で生きるテクというのはがむしゃらに攻めるだけで有効打を取れないことをいうのか？」

「……なんだと？」

大賀の声のトーンが低くなる。対する龍馬もまた、見下げるようにして大賀を睨んでいる。冷ややかさのこもった彼の視線に対し、額に青筋をたてた大賀はギラギラと紅い輝きを湛えた眼光を、真っ向からぶつけ返す。

いつものごとく一触即発のにらみ合いを始めた二人。十年近い付き合いで幾度と無く直面した場面ではあったが、慣れたわけでもなく、内心大きな嘆息を漏らした。両名の剣道においての対立は、時として周りを巻き込む殴り合いにまで発展することがあるため、静観を決め込むわけにもいかず、頭を抱えた。なんとか仲裁できないかと言葉を

探す。

……だが、両者の空気は息苦しくなりそうほど張り詰め、お互いの竹刀を握る腕には静かに、確実に力がこもり始めている。

(あー、しまった。タイミング逃したな)

内心舌打ちをする。こうなってしまうと、膨らんだ水風船に針を刺そうとするようなものだ。ちよつとした刺激が暴発につながる。そうなれば、二人の怪我云々だけでなく、自分や雲雀、昌巳にまで被害が及ぶ——そこまで考えた瞬間。

昌巳の寝返りをうった手が、大きな音をたてて床を叩いた。

「バカヤロ——」

非難の声をあげようとした瞬間、拮抗が崩れた。龍馬の竹刀が飛び上がる燕のように跳ね上がり、大賀の得物へ降下する鷹の一撃がそれを迎撃する形で打ち下ろされる。うかつだった自分と昌巳に毒づくこと、その軌道から飛びのきながら体をひねって竹刀に手を伸ばそうとし、

「はいストップ」

唐突に響いた間の抜けた声に動きを止めた。呆気にとられ二人とみると、お互いに得物を振りぬこうと半分ほど腕を進めたところで止まっていた。大きく目が見開かれた顔には先ほどはなかった大量の脂汗が浮かんでいる。

なにが起こったのか。刹那とも言える間の出来事に、目を白黒させる。原因を探して視線を動かすと、二人の間に雲雀がいることに気が

ついた。龍馬や大賀に比べ頭ひとつ小さい彼は、少し体勢を低くするだけで二人の懐に潜り込んでいたようで、その手は両者を遠ざけるように広げられて……いるのではなく、何を思ったのかがっしりと両者の股間部分を握り締めていた。明らかに不機嫌な表情をした彼はその手をそのままグリッとひねる。

「ほでゅああっ!？」

「……っ!」

一瞬ガクンと仰け反って竹刀を手から落とした後、大賀は膝から崩れ落ち、龍馬は静かにその場にうずくまった。

「うわあ……」

キュン、となにかが引き締まるような感覚に思わず腰をひいた。ビクビクと痙攣を繰り返す二人を哀れに思いながらも、加害者である雲雀へ視線を向ける。

「あのさあ二人とも、別に喧嘩が悪いとは言わないよ。君達の場合は特に」

惨状を引き起こした張本人はどこ吹く風といった感じに、母親が子供を叱る（実際に叱っているわけではあるが）ように腰に手をあてながら雲雀がうずくまる二人を見下ろす。

「けどさ、今は大切な時期だっけと忘れてないよね？」

怒気の含まれた眼下の二人問いかけ。

大賀は股間を押さえ意味不明な奇声を漏らし、龍馬は竹刀にすがり

ながら腰の後ろを叩いている。

「先輩たちも引退して、新しい部長も決まって、新しいスタート切って、大会が間近になって……わかるでしょ、今の状況での喧嘩がいかにか危険か？ ねえ、聴いてる？ 聴いてないんだったら、今度は指でいくよ。指でぶちっと」

「……いや、もう勘弁してやれよひばりん」

ぐりぐりと指先同士をこすり合わせる友人の姿に底知れぬ危機感を感じ取り、手を上げて静止する。こちらの頼みを聞いてはいい、と返事をしてくれたが、不満は残ったらしくツンと唇を尖らせて頭の後ろで腕を組んだ。その姿に喝いた笑いが口から漏れたが、気を取り直すと膝について二人の腰をさすってやる。

「大丈夫か、二人とも」

「なんとかね……」

「くっそ、あのアルティメットサディスティックヒューマンめっ……」

「……ボールは」

「つぶれてはいない」

「つぶされてたまるかっ」

反応はそれぞれであるが、二人ともなんとか問題はないらしく、安堵の息が漏れる。

「まあ、なんにしても喧嘩両成敗ってーわけだ！ な！」

「だまれハゲ。いきなり出てきて綺麗に収めようとするな、ハゲ」

ぺっかーと5月に咲いたヒマワリ見たいな笑顔でいる昌巳に、精一杯の怨念をこめて言葉を返してやる。その言葉が効いたのか、少女マンガチックな衝撃の受け方をして昌巳が慄いた。

……ツツコミ待ちなのだろうと無視して立ち上がる。道場の前へと視線を持っていき、『心・技・体』と書かれた垂れ幕を見る。深く息を吸い、一連の流れからくる動揺を吐く息と共に体の外へと押しやる。一度では足らず、二度三度と繰り返し、ようやく落ち着いたところで、四人へと視線を戻した。

「まあ、なんにしてもひばりんが言ったように、今の時期が大変なこと間違いはない。先輩達が抜け後輩はほとんどやめた現状じゃあ、俺達が必要なんだ。オーケー？」

四人がバラバラに頷く。それに頷きで返すと、いまだ膝をついている二人へ目を向ける。

「……悪かったよ」

「……すまない」

「いいさ。けど、たつもタイガーもほどほどにしておいてくれ、こっちの体と精神が持たないからさ」

心苦しそうに視線を下げる二人に苦笑しながら言うと、二人そろって小さくなった。そんな二人に今度は微笑を返して言葉を続ける。

「大会まであと一ヶ月をきる。夏の大会は団体も個人も地区の二回戦に行っただけだ。目標まではまだまだ遠い」

言葉を切り、四人を順番に見ていく。昌巳、雲雀、大賀、龍馬。十年という日々が過ぎても、真摯な目で見返してくれる。考え方の相違や立場の違いがあつたとしても、今の自分達は一つの『目標』の前で、等しくそれを見上げている。

「だから、今度はもつと上を目指したい。少なくとも個人団体両方で地区三、四回戦までは」

「今の時期にそれができなきゃ、全国制覇は夢のまた夢……ってか。大変なこと。……やりがいはあるがな」

言ったのは昌巳だった。腕組みをし、口元をニヤリと吊り上げている。それに答えるように、雲雀は軽く頷き、立ち上がった大賀と龍馬も互いに目配せして不敵な笑みを浮かべた。

「けどよ、どうせなら全国出場くらいまでは掲げねーか？ 地区の四回戦も決勝も大差ねーんだからさ」

「そうだな。それくらいはすべきさ」

大賀の言葉に龍馬が賛同する。

「……オーケー、ならもつと練習を綿密にしていけないといけないな」道は違えど行き先同じなのだ、と思うと自然と顔が緩んだ。当人たちはこちらの考えを知ってか知らずかブイと視線を外しあっている。

「約束を守るっていうのも大変なもんだね」

わざとらしい溜息をつけて大げさに肩をすくめる雲雀。その後ろの昌巳は短く笑うと顎に手を当て、ふむと呟く。

「しかも、先輩方に果たせなかった目標を果たしてくれといわれているからなあ。背中に背負ったものは大きいぞお」

「うわーそれはたいへんだなあ」

芝居がかった口調に棒読みの口調が切り返す。

そうして二人で声をあげて笑い始めた。それにつられるように大賀や龍馬、そして自分も笑う。

(なんとも頼もしい仲間だよ、まったく)

口に出せば冷やかされるであろう言葉を胸中で呟き、なんとなく今見える光景を昔の姿と重ね合わせた。

昌巳は今と変わらない坊主頭をして今よりさらに小さかった雲雀にもたれかかるようにして肩を組み、雲雀はそれを笑顔で引き剥がそうとし、大賀と龍馬は笑い合いながらも相手の頬を抓る指を離そうとはしない。そして、自分はその様子を、もう一人と一緒に笑っている。そして、自分はいつもそれを見ていた気がする。

「よし、久しぶりに円陣くむか！」

ヒマワリのような少女の笑みまで思い出したところで、バツと腕を突き上げて叫ぶ。呼応して、四人がその合間を締め、肩を組んだ。

「ドラマの見すぎじゃね？」

「けど、冷めてるよりはいいんじゃない？」

「ちげーねえ」

「こういうのも嫌いじゃない」

顔をつき合わせ、言葉を交わし、笑い合う。いつもの光景である。

「よっしゃ！ そんじゃあいくぜ！」

こちらの呼びかけに、すかさず四人がおう！ と応えてくれる。胸の奥から燃え上がってくるものを吐き出すために、思いつき息を吸い――

「行くぞ、ぜんこ――」

「おーい、男子いるー？」

その場に無かった声の闖入に、吐き出しかけた言葉を飲み込んだ。

組んでいた肩を外しそちらをみると、見慣れた胴着すがたの少女が入り口から顔をだしていた。

「どうした？」

「女子の方だけど、今日は用事がある人多いから、練習切り上げることにしたんだ」

「わかった、鍵はやっつくよ」

ありがとー、と泣きボクロのある顔が笑顔になってからひっこんだ。練習終わりということ、シャワーでも浴びにいったのだろう。

と、いつの間にか自分以外のメンバーも、自分と同じように少女が顔をのぞかせた入り口を見ていた。無表情で。

「どうしたよ」

不吉な予感が頭をよぎり、四人に問う。返答はない。が、昌巳がフツと笑みをこぼした。そうして、遠い目を――それこそ、去っていった少女の行き先を見据えるような目をして呟いた。

「よし、覗きにいこう」

「オイ」

「昌巳、僕先輩からシャワー室の見える場所聞いてるよ」

「オイ」

「ナイスだ雲雀。おい龍、置いてくぞ」

「オイって」

「ま、まて、すぐ防具を外す」

「……………」

嵐のように我先にと道場から出て行く四人。こちらの声など耳に入っていない（それか黙殺しのか）らしく、ボタンという扉の音だけが無情な響きを道場に残した。

「あ、あれえ……」

再び閑散とした道場にこぼれた声だけが虚しく響いた。……なんとなくわかっていたこととはいえ、言葉にできない何かが胸にこみ上げてきて、思わず天井を仰ぎ見た。

窓の棧に腰掛け、ぶらぶらと足を漕ぐ。乗り出して見上げる空は、流れていく雲以外に変化はなく、蒼い。そのなかでも深い蒼の部分を

じっと見つめてみると、不意に聞きなれた叫び声が響き、漕いでいた足をとめた。

近づいてくるわめき声と足音に、仰け反って垣根の外へと視線を動かした。逆さまに映る垣根の外を、バカルテット（今命名した）が罵詈雑言を後ろへと投げつけながら走り抜けていく。そして、彼らが駆け抜けた後を、今度は無精ひげを生やした我らが顧問教師が、彼らに負けないくらいの罵詈雑言をわめき散らして走り抜ける。どうやら覗きは未遂で見つかったらしい。

アホらしくなって、視線をまた空へと向けた。雲は滞りなく西から東へと流れている。

「平和だなあ」

また間の抜けた言葉が口からでた。